



# 秀吉の御土居

**はじめに**  
1200年以上の歴史をもつ京都は、みやびな雰囲気や漂う古都として、内外問わず多くの観光客が訪れます。しかし、千年以上も同じ姿を保ち続けたわけではありません。

応仁元年(1467)から約10年におよんだ応仁の乱は、平安京の大半を焼き尽くし、古来の姿は失



鷹峰の御土居跡

われました。さらにこれ以降、本格的な戦国の世を迎えたので、たびたび戦乱にまきこまれて上京と下京に分断され、それぞれが「惣構」という堀や土塁で囲われた個別の街になっていました。

このように荒れ果てた平安京を復興し、大規模な再開発を行って現在の京都市街の礎を築いたのは戦国の覇者となった豊臣秀吉でした。

## 秀吉の都市計画

秀吉は自分の居城として聚楽第を建てるとともに、天皇や公家、武家、町人といった身分によって住む場所を分け、寺社を鴨川沿いに集中させて寺町をつくりました。さらに、一辺120mの正方形の町割りを長方形にするなど、それまでとは異なる都市を作ったのです。

そして天正19年(1591)に、この新しい京都を土塁と堀ですつかに豊臣政権はこれを「洛中惣構」と呼びました。つまり、洛中を囲む惣構だという姿勢を示し、洛外との分離を図るための境界線であったことがわかります。しかし、単なる境界線としては、かなり大袈裟な施設のように思えます。

## 天皇の牢獄

京都造形芸術大学の名誉教授である建築家の渡辺豊和氏は、御土居は天皇の牢獄だったという独自の説を唱えました。

渡辺氏によれば、秀吉の主人だった織田信長は、絶対的権力者となることを望み、朝廷による征夷大將軍への推挙も拒絶していました。このままでは朝廷を廃して天皇になりかわり、日本の王として君臨しなげません。そこで朝廷は、明智光秀をそ

り囲んでしまいました。これが秀吉の御土居です。

## 秀吉の御土居

御土居の全長は、なんと約2.5kmもあり、東は鴨川、北は鷹峰、西は紙屋川、南は九条を限りとして市街地のみならず、広大な田畑も囲んでいました。

御土居は、土塁の外側に堀を併設した構造で、規模は場所によって異なりますが、大正9年(1920)の実測図によると、土塁の基底部が約22m、高さが約5m。堀は幅が約14m、深さが約4mとなっており、土塁の上には竹が植えられています。ただし、東は鴨川、西は紙屋川に沿って土塁が築かれていたもので、ここには堀が築かれることはなく、川が天然の堀となっていました。それにしても、土塁と堀を合わせた幅が約40mもあり、高さ5mの土

地位を獲得しますが、光秀謀反の背後に朝廷の影があったことを察知します。

秀吉は朝廷と対立する危険は冒さず、主の信長を討たせた正親町天皇を退位させて、若い後陽成天皇の即位を決定しました。さらに京都全域を囲う牢獄として御土居をつくり、朝廷直属の警察機構を廃して、朝廷と外部との情報流通を完全に遮断したというのです。

## 御土居の目的とは

このような面白い説もあるくらい、御土居は「おびに短し、たすきに長し」といった感じで、なかなか主たる目的が見えてきません。そのような中で大阪市立大学大学院教授の仁木宏氏の「秀吉だけが京都全体を守り『平和』をもたらしうことを喧伝する装置」という説は魅力的です。

先にも述べたとおり、戦国期の京都には上京と下京に分かれており、大名が相争っている中で、それぞれが惣構を築いて自衛するしかありませんでした。しかし、天下統一を成し遂げた秀吉が、両京をふくむ広大な範囲に惣構を築くことによって、今後は自衛の必要がないことを京都の人々に喧伝したというのです。

そう考えれば、防備には現実的ではない2.5kmの全長も、「俺ならばこの広さでも守れる」という大風呂

皇の上には竹が植えられていたので、竹の高さを10mと考えれば土塁とあわせて5階建てのビルに相当します。かなり壮観な眺めだったことでしょう。ところで、この御土居ですが、何のためにつくられたのか、よくわかっていません。

## 都市防衛のため

まず考えられるのが、都市防衛です。御土居のように、城や町のすべてを囲んだ城壁は「惣構」と呼ばれ、敵の襲来に対する防衛施設であるのが普通です。ただし、通常の惣構の場合、城や市街地など限られた空間を囲むのですが、秀吉の御土居は市街地のみならず田畑も含めた全長約2.5kmという長大なものでした。この長さだと敵の侵入を防ぐためには、相当な数の兵士が必要になります。

また、土塁の上には竹が植えられていたので、兵士が土塁上を移動しやすかった。また、土塁の上には竹が植えられていたので、兵士が土塁上を移動しやすかった。また、土塁の上には竹が植えられていたので、兵士が土塁上を移動しやすかった。

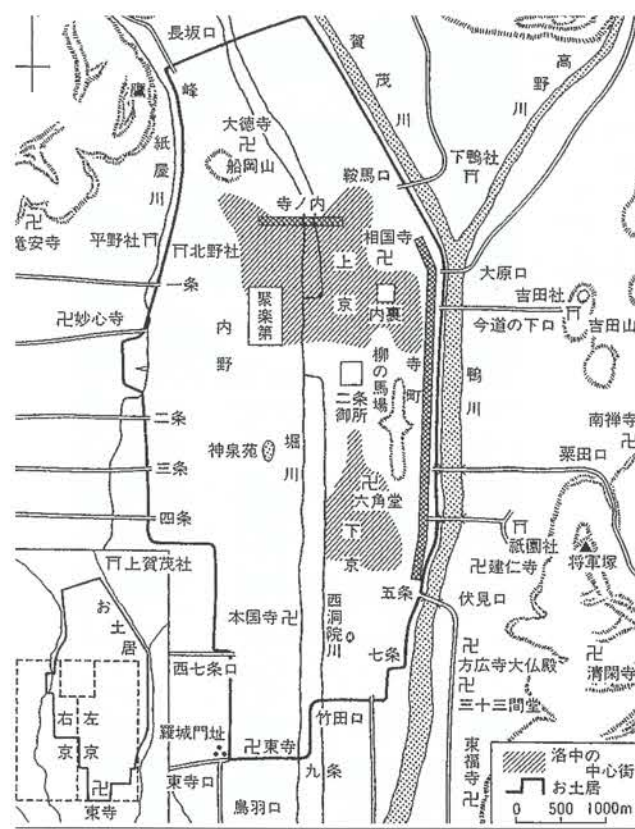
## おわりに

秀吉の死後、徳川の世を迎えても御土居はその大部分が健在でした。しかし、明治十年代になると御土居の私有地化が認められ、どんどん切り崩されていきました。現在では史蹟に指定された9箇所のみで、寺院の境内などにわずかに残るのみです。

ちなみに京都駅の0番ホームは、御土居の土塁を利用して造られたという伝説があります。「御土居堀ものがたり」の著者である中村武生氏によれば、これは誤りで実際には御土居の堀跡に新たな土壇を築いたものだからです。この辺りに御土居があったという研究者の言が一人歩きして、このような伝説が成立したと中村氏は分析しています。

そのほかの今に残る御土居跡を紹介すると、北野天満宮の御土居跡は紅葉が美しく、その時期には一般公開されます(平成25年は11月2日から12月8日)。鷹峰の御土居跡附近には本阿弥光悦ゆかりの美しい光悦寺や、血天井で有名な源光庵などの名所があります。今年の秋には趣向を変えて京都の御土居めぐりなどができそうです。

(文:江口知秀)



御土居の範囲 京都市編「京都の歴史」第4巻より

そのかして信長を討たせたというのです。これを知った秀吉は、「中国大返し」として知られる素早い行動で光秀を討ちとり、信長の後継者としての